

埋文だより

第90号

令和5年2月28日発行



環状土坑墓 A 群

環状に並ぶ土坑墓群

環状土坑墓 B 群

直線状に並ぶ
ピット群

埋葬時の様子（想像図）

空撮後に発見
された土坑墓

この空中写真は、立塚遺跡（鹿屋市吾平町）で発見された弥生時代早期（約2,800年前）の土坑墓群です。

この土坑墓群（A群）は、おおよそ南北約70m、東西約45mほどの楕円形の外周上に、環状に配置されています。また、A群南側にも環状に配置されていたと考えられる土坑墓群（B群）が発見されています。

このように環状に配置された土坑墓群は、弥生時代では知られておらず、国内で初めて発見されました。縄文時代から引き継がれた南九州独特の墓制であると考えられます。

目次

- ・ 弥生時代早期の土坑墓群を発見…………… 1
- ・ 発見！発掘速報（公財）…………… 2・3
- ・ 発見！発掘速報（県）…………… 4
- ・ 河コレ遺跡めぐり（⑦ 平梶貝塚）…………… 5
- ・ 現地説明会…………… 6

発掘速報

今年度、県内各地で発掘調査を行っています。今回は(公財)埋蔵文化財調査センターの発掘調査成果の一部も紹介します。



いよいよ主郭の調査を開始 ―虎居城跡―(さつま町宮之城)―



虎居城跡(さつま町宮之城)は、鹿児島県を代表する中世山城のひとつで、川内川が堀の役割を果たす天然の要塞です。大前氏により康治年間(1142年頃)に築城され、宝治2(1248)年から、約300年間祁答院渋谷氏の居城であったと考えられています。祁答院渋谷氏の滅亡後は、天正8(1580)年に島津歳久が領主となり、慶長5(1600)年に島津忠長が宮之城の地頭として移りました。元和元(1615)年の一国一城令が發布された後は、宮之城島津家の家臣の居住地などとして、一部が利用されたと考えられています。

本年度は、松社城跡(主郭)のすぐ下の曲輪を調査しています。建物跡の可能のある柱穴の跡や、用途は不明ですが石を並べた配石遺構(集石)が発見されています。遺物では、中国から輸入された青磁や景德鎮窯系の白磁の皿や青花の碗をはじめ、福建・広東地方(漳州窯系など)の碗・皿が出土しています。形や絵柄から、島津歳久の頃の16世紀後半の陶磁器が多いことが分かってきました。

その他、松社城跡では、過去の調査から庭園を思わせる大石や、方形に区画された伝統的な区割りの配置があることが分かっています。今後も、さらなる調査を進め、公園整備に生かしていく予定です。



調査の様子



上空からの虎居城跡



配石遺構

県内最大級の古墳時代の竪穴建物跡を発見



―二子塚B遺跡―(曾於郡大崎町持留)―

二子塚B遺跡は、曾於郡大崎町持留に所在し、谷間に囲まれた標高約160mの台地上に位置し、東側の低地には持留川が流れる場所に立地します。県道黒石串良線地方特定道路整備事業に伴い、10月～2月の期間約1,300㎡を対象に発掘調査を行いました。

今回の発掘調査では、主に古墳時代前期(約1,500年前)と縄文時代早期(約9,500年前)の遺構・遺物が出土しました。古墳時代前期では、竪穴建物跡2基と多数のピット群を検出し、特に遺構内からは成川式土器(東原式土器)が主に出土しました。竪穴建物跡のうち1基は直径10mほどあり、古墳時代の竪穴建物跡では県内でも最大級のものと考えられます。

縄文時代早期では、集石5基と土坑、ピット、遺物集中などが検出されました。遺物は加栗山式土器や石坂式土器、下剥峯式土器、手向山式土器、塞ノ神式土器などの多くの型式の土器が出土しており、この遺跡では縄文時代早期前葉から後葉まで、連綿と人々の生活が営まれていたことが想像できます。



大型の竪穴建物跡



縄文時代早期の集石

発掘！数千年前の樹・木製品・木たち

―六反ヶ丸遺跡(出水市六月田町)―



六反ヶ丸遺跡は、鹿児島県の北西部、出水市六月田町に所在します。遺跡の西約200mを八代海へ北流する米ノ津川が流れ、標高は約6mです。南九州西回り自動車道の建設に伴い、平成29年度から調査を実施し、本年度の本調査をもって調査は終了となりました。

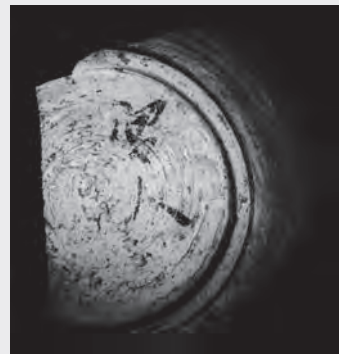
本調査では、古墳時代の土器及び小石が集中している範囲が見つかりました。遺物集中部では、成川式土器をはじめ熊本地域の土器などが出土し、在地系土器と外来系土器の双方が確認できました。また、文字が墨で書かれた平安時代の土器も数点確認されました。さらに、下層調査で、「丸木弓」や木製品、自然木が発見されました。その近辺には、熊本地域の弥生土器である黒髪式土器の破片が出土しています。自然木の中には、一部加工痕が残るものも確認できました。鹿児島県では類例の少ない木製品等が出土したことは、大変貴重な発見であり、今後の研究成果が期待されます。



丸木弓出土状況(弥生～古墳時代)



土器集中部出土状況(弥生～古墳時代)



墨書土器「宮人」

阿久根城跡の麓に中世の有力者の集落を発見



―北山遺跡―(阿久根市山下・波留)―

北山遺跡は、阿久根市山下・波留の愛宕山の麓に広がる標高約33mの台地上にあり、南九州西回り自動車道の建設に伴って、令和2年度から発掘調査を行っています。

これまでの発掘調査で、縄文時代早期(約9,000年前)の集石や土器、古墳時代(約1,600年前)の竪穴建物跡や鎌倉時代(約800年前)から室町時代(約600年前)の竪穴建物跡や掘立柱建物跡、堀跡や道跡、さらに江戸時代(約300年前)の炉跡も確認されました。焼土や鉄滓が多量に出土していることから、鍛冶炉や炭窯があったのではないかと考えられます。また、遺物では、平安時代のへら書きのある土器や須恵器、中国から持ち込まれた青磁や白磁等も出土しました。これにより、北山遺跡は鎌倉時代から室町時代(13世紀～16世紀)頃に、阿久根を治めた有力者の集落である可能性が分かってきました。



落とし穴(縄文時代以降)



古代のへら書きのある土器



鎌倉時代の竪穴建物跡



莫祢氏の支城で発見されたものは



—新城跡—(阿久根市山下)—



新城跡は、阿久根市山下にあり、高松川の左岸標高約 35mの台地の北端に位置しています。南九州西回り自動車道の建設に伴い、令和2年度から発掘調査を行っています。

南東にある愛宕山には中世莫祢氏が阿久根(莫祢)城を築きました。さらにその西の麓台地上には、中ノ城、新城、大石城、小田城、賀喜城などの支城が点在していました。新城跡は、山下北方の防衛のために莫祢氏によって築城され、永禄元(1558)年の頃には、阿久根の地頭であった阿久根播磨守平良有が居城していたといわれています。

今回の調査では、鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物跡が5棟、炉跡が10基、竈状遺構が1基、ピットが約150基、城の登り口である虎口の可能性がある道跡や大きな窪地など、山城の特徴と考えられる遺構も発見されました。また、鎌倉時代から室町時代の青磁、播鉢、鉄器、滑石製石鍋、江戸時代の陶磁器などの遺物も出土しています。



新城跡全景



炉跡の調査状況



竈状遺構

台地に広がる古墳時代の集落跡

—萩ヶ峰A遺跡—(鹿屋市白水町)—



萩ヶ峰A遺跡は、鹿屋市白水町に所在し、鹿屋市北西部丘陵地の縁辺部に位置しており、標高は約140mです。国道220号古江バイパス建設に伴い、H26～28年度と今年度調査を行いました。

これまでの調査で、古墳時代中期頃(約1,500年前)の土器を伴う堅穴建物跡が4軒発見されています。特に、今回の調査範囲の中では、10mごとに堅穴建物跡が発見されており、密な状態ともいえます。また、本来の遺跡は、調査範囲よりもさらに広いことが想定できるため、大きな集落だった可能性があります。

この時期の堅穴建物跡の平面形には、方形を基本としてさらに張出しをもつもの、円形、花卉形などがあります。本遺跡の堅穴建物跡は、耕作などで削られてしまった部分もあることを考えると、本来の平面形は、花卉形であった可能性もあります。

萩ヶ峰A遺跡以外にも、隣接地の萩ヶ峰B遺跡・白水B遺跡・山ノ上A遺跡も調査を進めており、当該時期の様相の一端が明らかになることが期待されます。



古墳時代の堅穴建物跡



古墳時代の成川式土器



河コレ遺跡めぐり

河コレ遺跡めぐり

⑦平栴貝塚(霧島市国分上井)

鹿児島県立埋蔵文化財センターでは、県考古学会の会長を長年つとめられた故河口貞徳氏の寄贈資料を整理・活用する事業に取り組んでいます。『埋文だより』では、これまで河口氏が取り組んだ代表的な遺跡調査を振り返り、貴重な遺物や発掘当時の様子等を紹介したいと思います。みなさんもぜひ遺跡のあった場所を訪れて、先人の暮らしに思いを馳せてみてはいかがでしょうか・・・。



平栴貝塚は、霧島市国分上井に所在します。国分平野の東端、検校川の右岸にあり、背後にある丘陵と平野との間に立地しています。国道10号線の国分南小前交差点を北進、1.2kmほど進み、国分南公園交差点を左折、200mほど進むと左手にあります。標高は20mほどです。

近くには島津家16代当主の島津義久の長女お平様の墓所があります。この地に幽閉されていたことから、「平栴」の地名となったようです。

平栴貝塚は陸上自衛隊国分駐屯地の隊員によって1969(昭和44)年に発見されました。その後地域住民より情報を得て、貝塚であることが確認されました。その後河口氏に連絡があったことで遺跡として発掘調査が行われました。

発掘調査は1969(昭和46)年6月17日から7月3日、8月12日から17日の2回、延べ23日行われました。調査には他の研究者数名と、鹿児島大学の学生、当時の国分市立南中学校の1年生数名が参加したようです。河口氏は、毎日鹿児島市から通って調査をしました。

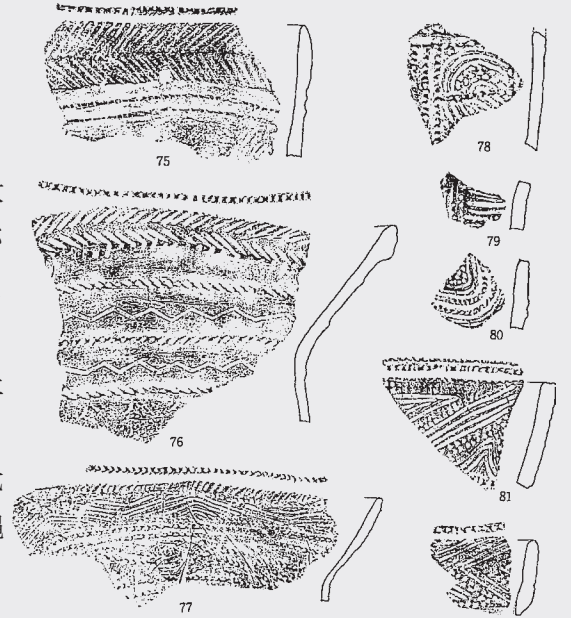
調査の結果、貝や獣骨を投棄したような深さ30～50cm程度の土坑が9基検出されました。何の骨だったのかは記載がありませんが、貝殻はハマグリが主体だったようです。また、平栴貝塚は縄文時代早期の貝塚であることが分かりました。県内で現在知られている縄文時代早期の貝塚は、霧島市隼人町の鹿児島神宮近くの宮坂貝塚とこの平栴貝塚の2か所のみです。

遺物は貝や獣骨とともに、前平式、加栗山式、吉田式、石坂式、下剥峯式、押型文、桑ノ丸式、塞ノ神式などの、縄文時代早期全般にわたって様々な型式の土器が出土しました。その中でも、口縁部付近に連続点や凹線による曲線を緻密に施文し、胴部は結節縄文を表面に転がして施文する土器は、現在平栴式土器と呼ばれ、この平栴貝塚が標式遺跡となっています。その後九州各地で平栴式土器が出土し、遠くは中国地方にも分布していたことが分かりました。ちなみに、上野原遺跡で出土した有名な双子壺も平栴式土器です。

平栴式土器の命名の由来になった、島津のお姫様のお平様。自分の名前が土器の名前として現在使われていると知ったら果たしてどのようなお気持ちなのでしょう？



平栴貝塚位置図



平栴式土器実測図



上野原遺跡出土の双子壺(平栴式土器)

現地説明会を開催！

みょうずばる
—立塚遺跡・名主原遺跡(鹿屋市吾平町)—



現在鹿屋吾平佐多線(吾平道路)の建設に伴う発掘調査が進められています。11月と12月に、立塚遺跡と名主原遺跡の2遺跡で現地説明会を開催しました。

立塚遺跡では、令和4年11月11日(金)に、現地説明会を開催しました。当日は天候にも恵まれ、平日にもかかわらず200名の来場者がありました。

会場内に「土坑墓群エリア」「調査風景エリア」「出土遺物の展示コーナー」を設け、説明を行いました。

国内初の弥生時代早期(約2,800年前)の環状土坑墓群の見学では、多数の土坑墓を前に、担当の職員が詳しく説明しました。遺物の展示コーナーでは、出土した多数の土器や石器などを展示し、出土遺物の詳しい説明を行いました。中でも国内最大級の管玉や、土坑墓から出土した壺型土器など、弥生時代早期の遺物を中心に見学しました。

名主原遺跡では、令和4年12月17日(土)に開催しました。当日は肌寒く、降雨のなか、80名の来場者がありました。

名主原遺跡では古墳時代前期(約1,500年前)の竪穴建物跡群が発見されており、間近で竪穴建物跡を見学し、複数の花卉形住居跡や遺構内に土器が多数出土している様子も見学しました。また、遺物コーナーでは、古墳時代の成川式土器や磨製石鏃などを展示し、担当者が詳しく説明をしました。

郷土の歴史に興味関心を持ってもらえるように、今後も現地説明会を実施していきます。開催する際はホームページ等で告知しますので、ぜひお越しください。よろしくお願いします。



土坑墓群の解説(立塚遺跡)



遺構の説明(立塚遺跡)



出土遺物の説明(立塚遺跡)



竪穴建物跡の解説(名主原遺跡)



地層の説明(名主原遺跡)



出土遺物の説明(名主原遺跡)

当センターの見学は、土曜・日曜・祝日・年末年始を除き、毎日午前9時～午後5時まで、入館料は無料です。

(現在新型コロナウイルス感染症予防のため、整理作業の見学は休止しています。)

なお、当センターのホームページは、鹿児島県(<https://pref.kagoshima.jp/>)から入るか「上野原縄文の森」で検索してください。

また、フェイスブックは右側のQRコードからお入りください。

検索キーワード

上野原縄文の森

検索

クリック



ホームページ



フェイスブック

埋文だより 第90号

発行日 令和5年2月28日
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市
国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811・FAX 0995-48-5820
URL: <https://www.jomon-no-mori.jp>
E-mail: maibun@jomon-no-mori.jp